

或本の歌に曰く

三二八一番

我が背子は 待てど来まさず 雁が音も とよみ
て寒し ぬばたまの 夜もふけにけり さ夜ふく
と あらしの吹けば 立ち待つに 我が衣手に
置く霜も 氷にさえ渡り 降る雪も 凍り渡りぬ
今更に 君来まさめや さな葛 後も逢はむと
大舟の 思ひ頼めど 現には 君には逢はず
夢にだに 逢ふと見えこそ 天の足り夜に